



論叢三十年を祝す

学 長 松 田 岩 男

「体育学論叢」が発刊されてから30年を経過した。ここに、第30巻が記念として刊行されることを心からよろこび、お祝い申し上げる。

本学に体育学部が創設されたのは、昭和34年4月であり、本誌は文字通りに体育学部とともに歩み、その発展を支えてきたものである。

現在の日本体育学会が設立されたのが、昭和25年であり、本誌が創刊された頃は、漸く体育学が独立した学問領域として認められ、体育系の大学や学部が誕生するようになった時期でもある。

その当時の関係者は、新しい学問として体育学の構築を目指して日夜努力を重ねていたが、本誌もまたその一環として、大きな役割を果たしている。

昭和39年の東京オリンピック大会の選手強化とも関連して、スポーツの科学的研究が急速に進展し、特に体力づくりに関する研究に強い心が持たれるようになった。

ところが、科学技術の発展に伴って産業構造が変化し、人口の都市集中化が進み、職場や家庭における機械化が一般化して、余暇時間が増大したが、自然との触れ合いの減少、身体的活動の減少による体力の低下、またストレスの増加による心の歪みなどが社会問題になってきた。

このために、“体力づくり”に関する研究も、選手強化の立場からだけでなく、一般の人々の健康・体力の維持向上の観点からも重視されるようになった。

このような背景の中で、選手強化と生涯スポーツの両面にわたって、健康や体力、体力やスポーツ技術のトレーニング法、バイオメカニクス、心理学や社会学の側面からの研究なども活発に行われるようになった。

本誌に収録された論文は、このような研究動向を反映しているといってもよいであろう。

この間、中京大学には、昭和49年に大学院研究科修士課程が設置され、さらに昭和62年4月には、私学では、はじめての体育学の博士課程が設けられるなど、競技スポーツにおけるめざましい活躍とともに、科学的な研究についても日本の学会をリードするまでに成長してきた。

このような現状を考えると、この記念号を契機として、本誌の一層の発展・充実が期待され、その実現を願わずにはいられない。

いうまでもなく、今日の発展は、関係者の皆さんの研究・教育に関する熱意とご尽力によるものであるが、それを支えてきた総長の梅村清明先生御夫妻と梅村清弘理事長の体育・スポーツに対する深い愛情とご理解によるご支援、ご協力を忘れてはならないであろう。この機会に皆さんに代って謝意を表したい。